

自閉症児における乗馬中の行動変化, 及び乗馬前後の行動に関するアプローチとその効果

藤井 梓^{1)*}・慶野宏臣²⁾・慶野裕美²⁾

1) 大阪教育大学大学院教育学研究科

2) なつか乗馬療育研究所

Behavioral changes in riding in children with Autism and the effect of the approach to the work of riding before and after

FUJII Azusa^{1)*}, KEINO Hiroomi²⁾, KEINO Hiromi²⁾

緒言 (Introduction)

乗馬療法は以前から身体的・心理的・社会的な効果があると言われており、近年日本でもその効果が研究されるようになってきた。また自閉症児における乗馬療法では、乗馬中の行動が大きく変化することが慶野らによって報告されている。今回我々は主に乗馬前後の行動に焦点を当てた。これらの行動は日常生活に通じるものが多く、乗馬を通して対象児がこれらの行動を習得することができれば、日常生活場面でのQOLの向上が期待される。そこで乗馬前後の行動強化を目指したプログラムを設定し、その評価、検討を行った。

方法 (Methods)

対象児：A児(12歳男 自閉症)、B児(13歳男 自閉症)

期間：2011年11月より月1回・2時間

乗馬プログラム：基本的に引き馬・常歩乗馬で、児童の発達に応じたいくつかのゲームを行う。対象児は途中で交代して2回騎乗し、活動後半に速歩も行う。乗馬中の行動についてはビデオ記録を基に、HEIM scale (慶野ら 2002) を用いて評定した。

乗馬前後のプログラム：第一期では、乗馬前の行動としてはじめの挨拶・にんじんをあげる・ブラッシング・道具を運ぶ・ヘルメットをかぶる・馬の背に乗る、乗馬後の行動として順番を待つ・道具を片付ける・ブラッシング・にんじんをあげる・馬にお礼を言う・終わりの挨拶の12作業項目を設定し、それぞれの作業の前にその作業内容を絵で表したカードを児童

に示した。乗馬中と同様にビデオ記録を基に、自発的行動の達成という視点から7段階で評定した。絵カードによる動機づけが達成された第二期では、自発的行動の達成を目標として12項目を1枚のシートにし、それぞれの作業が終わる度にその作業の箇所にシールを貼るという活動を加えた。また全ての作業終了後にシートを見ながら作業内容を振り返り、ご褒美に馬のシールを貼ることで、自発的行動が強化されるかを検討した。

結果 (Results)

乗馬中の行動を評定したHEIMscaleにおいてほぼ全ての項目で得点の増加が見られた。特に得点の増加が見られた項目は突発行動(A児)、情緒発現・執着行動(B児)であった。2名とも満点となったのは対人関係・突発行動・執着行動・注目行動・恐怖反応の5項目であった。乗馬前後の行動に関しては、第一期において対象児2名とも「馬の背に乗る」項目が当初より満点であり、その他の全ての項目において得点が増加した。また2名とも乗馬後よりも乗馬前の得点増加が大きく、特にB児はその傾向が顕著であった。(図1, 2)第二期におけるアプローチは現在継続中であるが、拒否する項目がなくなる、次の作業内容を把握し自発的に行動するなどの変化が現れつつある。

考察 (Discussion)

乗馬中の行動では、先行研究で効果が報告されていた項目とほぼ同じ項目で顕著な変化が見られた。これ

*連絡先：ahty3287@yahoo.co.jp

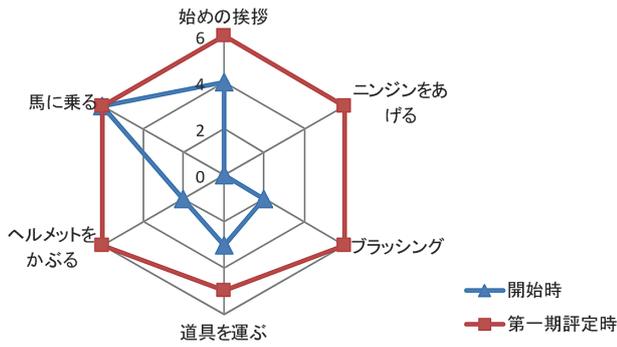


図1 B児 乗馬前

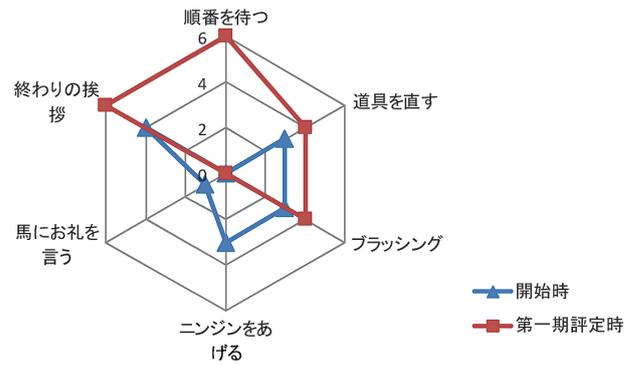


図2 B児 乗馬後

は乗馬中に周囲の人と関わるが増え、好きな活動を催促することや自分の意思を伝えようとするが増えたことによるのであろう。またB児は、笑顔が全く見られなかったが、速歩のときに笑顔が出始め、現在では馬場に入るなり笑顔を見せている。さらに常に手に持っていた腕時計を乗馬中は母親に預けることができるようになった。母親によると、家庭でも腕時計に執着することが少なくなったという。2名とも最初は速歩の際に笑顔が見られ、その後笑顔が発する場面が徐々に多くなった。それ以降活動への自発的な意思表示が見られ始めたことから、対象児がまず速歩を楽しんでいると感じ、それがきっかけとなって乗馬活動全体が楽しいものになっていたのだと考えられる。

次に乗馬前後の行動においては2名とも乗馬前の項目の得点増加が大きく、特にB児はその傾向が顕著であった。乗馬後は拒否する項目が多くあった。対象児にとって乗馬前の項目は作業の目的がわかりやすいこと、作業の後に楽しく馬に乗れることで行動が強化され得点が増加したと推察される。この結果を踏ま

えた第二期のアプローチは現在継続中であるが、対象児の行動には徐々に変化が見られてきている。例えば、男児Bは作業の順番を覚え「次は何?」と聞くと「ブラシ」などと答えるようになり、また乗馬後の項目についても、拒否する項目がなくなり馬場から出ることなく後片付けの作業を行うことができるようになった。このことから、児童にとって行動の動機となり得る活動を見つけ、その活動前に定着させたい行動への働きかけをすることが効果的であることが示唆された。また、活動の順序や内容を固定化した上で、児童の特性に合った方法で提示し、その行動の達成を目に見える形で提示することの重要性が示唆された。今後は第二期の評定を行い、さらにアプローチの改善を図っていくことが必要である。

謝辞 (Acknowledge)

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました児童、保護者の方々にお礼申し上げます。